

研究主題「学んだ国語の知識を生かして言語活動を行う力を高める指導法の工夫 ～文と文をつなぐ言葉に視点をあてて～」

東京都教職員研修センター研修部専門研修課
港区立芝浦小学校 教諭 高橋 啓子

研究のねらい

言語を介して人間の生活を豊かにしていくためには、自分の考えを正しく伝える力や相手の考えを正しく理解する力が必要である。しかし、今、児童の実態として、学習や生活において言葉の働きをよく考えずに論理的とはいえない言語表現をし、相手に自分の気持ちを十分に伝えられない場面が見られる。

「小学校学習指導要領解説国語編」では、言語能力を日常生活に生きて働く力として育成することの大切さ、文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」(平成16年2月)では、国語の運用能力の重要性が述べられている。さらに、平成14年度「国語に関する世論調査」の結果では、社会全般の課題としても個人の課題としても、「考えをまとめ文章を構成する能力」が最も上位となっている。

そこで、文と文の関係を考えながら言葉をつかい、論理的に考えることのよさを味わえるようにすること、学習や日常生活で学んだ国語の知識を生かしながら言語活動ができるようにすること、以上2点の指導法の工夫を研究のねらいとし、文と文をつなぐ言葉に視点をあてて研究を進めることにした。

研究の内容と方法

1 基礎研究	2 調査研究	3 実践研究
論理的思考力及びつなぐ言葉の視点から分析 ・ 小学校学習指導要領及び解説 ・ 関連の文献、答申 ・ 先行研究 ・ 小学校国語の教科書	つなぐ言葉のつかい方の視点から分析 ・ 所属校児童の作文 (平成14年度及び平成15年度の文集)	・ 検証授業(国語科)の実施と考察 ・ 国語科及び他教科等で生かす場面の検証 ・ 第3学年の指導計画例作成 * 書く活動の場面を中心に

本研究では、「つなぐ言葉」を文と文をその内容の上でつなぐ機能の面からとらえており、接続詞の他に、副詞、名詞+助詞、指示語+名詞及び助詞等の一部も含めて考えている。

研究の経過と考察

1 基礎研究

(1) 論理的思考力育成の視点から

小学校学習指導要領(国語)及び解説(国語編)から、小学校国語科において「論理的に考える」とは、発達段階に応じて以下のように考えることであるととらえた。

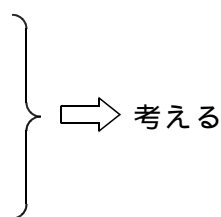
第1・2学年...「事柄の順序を」

第3・4学年...「筋道を立てて」「中心に気を付けて」

「段落相互の関係を」「文章の組立てを」

第5・6学年...「要旨を把握して」「事象、感想、意見を区別して」

「自分の立場や意図をはっきりさせて」



文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」では、「考える力」を分析力、論理構築力などを含む論理的思考力としている。そして、その基盤となる国語の知識

は、表1のとおりである。これらのうちの文法と内容構成に関する知識を本研究では取り上げている。

表1

《国語の知識（例）》
・語彙（個人が身に付けている言葉の総体）
・表記に関する知識（漢字や仮名遣い、句読点の使い方等）
・文法に関する知識（言葉の決まりや働き等）
・内容構成に関する知識（文章の組立て等）
・表現に関する知識（言葉遣いや文体・修辞法等）
・その他の国語にかかわる知識（ことわざや慣用語の意味等）

(2) つなぐ言葉の視点から

小学校学習指導要領解説(国語編)によると、接続語は中学年で重点的に取

り扱うとされているが、低学年、高学年でも接続語の指導に関する記述がある。したがって、低学年での学習を基盤に、高学年への見通しをもって指導することが大切であると分かった。

先行研究から、文と文との接続関係は、以下のように分類されることが分かった。

表2	展開型	前の文（またはその一部、以下同じ）の内容を受け、それをあとの文で展開する関係
	反対型	前の文の内容に対し、あとの文でそれと反対の事柄を述べる関係
	累加型	前の文にあとの文を累加・並立する関係
	同格型	前の文とあとの文が同格・くり返しである関係
	補足型	前の文に対し、あとの文で説明を補足する関係
	対比型	前の文にあとの文を対比・対立させる、または選択させる関係
	転換型	話題を転ずる関係
		《「国語資料図解言語事項事典」より》

小学校国語の教科書(平成16年度用A社及び平成17年度用5社)に使用されているつなぐ言葉を の分類により分析し、使用状況を把握するとともに、低学年、中学年、高学年それぞれでつかい方を理解させたいつなぐ言葉を次のように考えた。

表3	学年	使用状況	つかい方を理解できるようにしたいつなぐ言葉
	低学年	展開型、反対型、累加型が主に使用される。	すると(展開型) だから(展開型) そこで(展開型) でも(反対型) けれども(反対型) そして(累加型) それから(累加型) *順序を示すもの(はじめに(展開型) 次に(累加型)等)
	中学年	転換型、同格型、補足型(理由)が加わる。	ところが(反対型) また(累加型) さらに(累加型) たとえば(同格型) このように(同格型) では(転換型) さて(転換型) *補足型のつなぐ言葉のうち理由を示すもの(なぜかという、理由は等)
	高学年	補足型(条件)、対比型が加わる。	しかし(反対型) これに対して(反対型) 一方(反対型) が(反対型) つまり(同格型) ただし(補足型) ただ(補足型) *対比型のつなぐ言葉(それとも、あるいは等)

2 調査研究(児童が使用しているつなぐ言葉の実態)

所属校第1学年から第6学年の児童(平成14年度340名、平成15年度330名)の作文に使用されているつなぐ言葉を調べ、国語の教科書(平成16年度用A社)に使用されているつなぐ言葉との関連から分析したところ、以下の結果が得られた。

- (1) 児童が使用するつなぐ言葉の多くは、第1学年及び第2学年の教科書で初出のものである。
- (2) 展開型の「だから」、反対型の「でも」、累加型の「そして」が、最も多く使用されている。
- (3) 同格型はほとんど使用されず、対比型、転換型は全く使用されていない。

この結果から、発達段階を見通してつなぐ言葉のつかい方等の指導を工夫する必要があることが分かった。

3 実践研究

(1) 検証授業

検証授業では、以下の3点に対する手だての有効性を追究した。

文と文の関係を考えてつなぐ言葉をつかうことよさに気付くようにすること。

つなぐ言葉の具体的なつかい方を理解できるようにすること。

つなぐ言葉を自らつかい、つかうことよさを味わえるようにすること。

表4 検証授業の内容と結果

時期・対象	第1回（6月下旬） 第3学年児童 28名	第2回（9月中旬） 第3学年児童 28名
内容	例示した児童作文から、つなぐ言葉のよさについて考える。 ・2枚の絵（教科書の説明的文章の場面）から簡単なお話を作り、つなぐ言葉をつかって文章に表す。	教科書教材での使用例から、同格型のつなぐ言葉「たとえば」のよさとつかい方について確認する。 ・担任に関することから話題を見付け、「たとえば」をつかって文章に表す。
結果	・自分のもつ国語の知識のうち、どのつなぐ言葉をつかったらよいかを考えながら、自分なりの文章を書く姿が見られた。	・説明的文章の読解での扱っただけでは、前後の文の関係が十分には理解できていなかった。つなぐ言葉をつかって伝えたくても、それを正確に書き表すことができない児童が見られた。

(2) 検証授業で明らかになったこと（児童の変容を促す働きかけで有効であったこと）

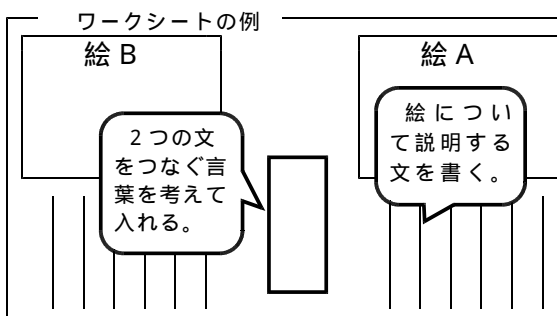
つなぐ言葉をつかうよさに気付くようにし、つかおうとするきっかけをつくるために

ア 説明的文章の学習と関連付けて、つなぐ言葉をつかうよさに気付くようにすること。

イ つなぐ言葉は既につかっているもので、学習することでより正しく伝えられることに気付くようにすること。

表5 効果的であった手だての例

場面	手だて
つなぐ言葉に関心をもつ。 つなぐ言葉のよさに触れる。 ・前の文に対して後の文がどのような関係にあるのかが分かる。 ・正しく読み取ったり、正しく伝えたりするのに役立つ。 正しくつかって伝えようという気持ちをもつ。 いろいろなつなぐ言葉がつかえることに気付く。	「ひみつの言葉」など、名称を工夫する。 児童が書いた作文の一部から次に書いてある内容を予想させる。 <例> わたしは、作文をがんばりたいです。二年生の時、先生が、「作文は、ほねを書いてから肉づけするとうまくなるよ。」と言いました。 けれど ・「けれど」がない場合と「けれど」が付いた場合について、次にくる文の内容の予想しやすさを比較するようにする。 つなぐ言葉があると、次の文の内容を予想しやすいのはなぜかということから、つなぐ言葉の役割を考えるようにする。 順番を変えられる2枚の絵（説明的文章の場面を利用）から簡単なお話を考え、つなぐ言葉をつかって文章を書くようにする。 友達が作った文章からつなぐ言葉を見付ける。 説明的文章の中のつなぐ言葉を見直す。



発達段階に応じてつなぐ言葉のつかい方を理解できるようにするために

ア 国語の教科書に使用されているつなぐ言葉の分析を生かし、どの単元でどのつなぐ言葉を学習するかを明らかにすること。

イ 説明的文章の読み取りで論理的な表現を学ぶ学習と関連付けて、つなぐ言葉の具体的なつかい方を理解できるようにすること。

ウ 教師自身が、学習や生活において話したり書いたりする場面で、つなぐ言葉を正しくつかうこと。

つなぐ言葉のよさを味わえるようにするために

ア つなぐ言葉をつかっていることを認め、つなぐ言葉のよさを思い出せるようにすること。

イ つなぐ言葉を正しくつかえ、正しく伝えられたことを価値付けること。

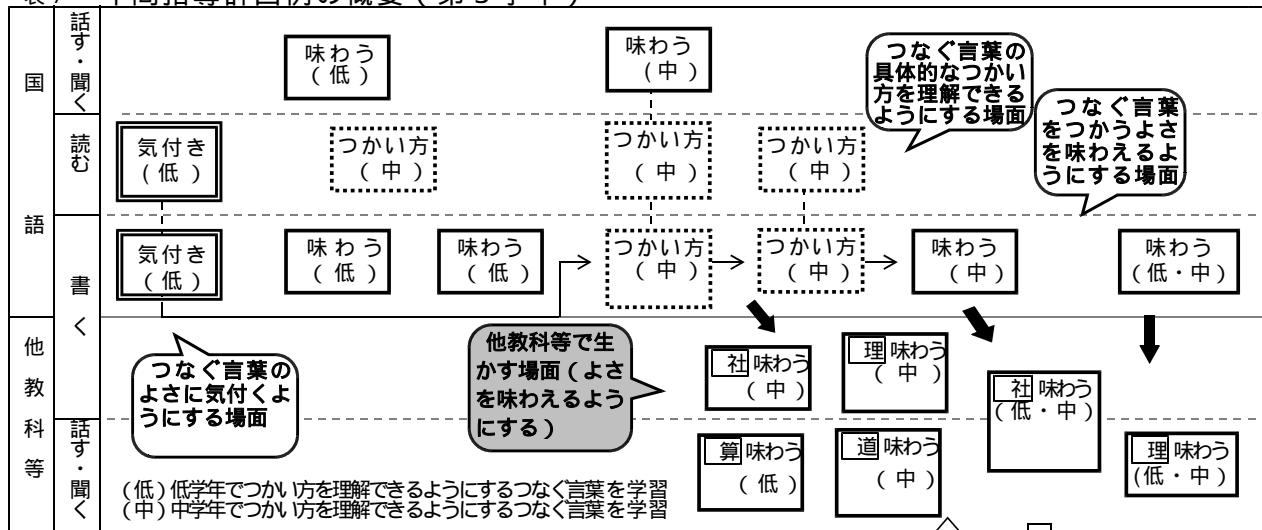
(3) 児童の変容の事例（検証授業を実施した所属校第3学年児童のつなぐ言葉の使用）

働きかけ	A 児	B 児	C 児
以前	第1・2学年及び第3学年で働きかけをするまで、つなぐ言葉を使用しない傾向。	第1・2学年では接続助詞を使用する傾向。 第3学年では、反対型、補足型（理由）を使用。	第1・2学年のころからつなぐ言葉を使用する傾向。 ただし、調査研究で多用されるという結果の得られたもの。
よさに気付くようにする	反対型、累加型のつなぐ言葉を使用するようになる。	展開型、累加型のつなぐ言葉も積極的に使用するようになる。	展開型、反対型、累加型、同格型のつなぐ言葉を数多く使用するようになる。
つかい方を理解できるようにする	「たとえば」（同格型）のつかい方をおおむね理解していたが、正しい文章は書けなかった。	「たとえば」（同格型）をつかった正しい文章が書けなかったが、説明を再度聞いて正しく書き直した。	「たとえば」（同格型）のつかい方を理解しており、正しい文章を書いた。
よさを味わえるようにする	展開型のつなぐ言葉も使用するようになる。 「たとえば」（同格型）を正しくつかえるようになる。	転換型のつなぐ言葉も使用するようになる。 「たとえば」（同格型）を積極的につかうようになる。	転換型も含め、様々な学習の場面（他教科等でも）で、つなぐ言葉をつかおうとする。

(4) 第3学年において文と文をつなぐ言葉を指導するための指導計画例

児童の変容を基に、「つなぐ言葉のよさに気付くようにする場面」「つなぐ言葉の具体的なつかい方を理解できるようにする場面」「つなぐ言葉をつかうよさを味わえるようにする場面」とそれぞれの場面で学習するつなぐ言葉を明らかにし、国語科の書く活動を中心にすえて、年間の指導計画例を作成した。

表7 年間指導計画例の概要（第3学年）



他教科等で生かす場面の例（児童の変容から）

教科等	活動	書く	話す
社会	調べ学習のまとめの資料、発表原稿	作成した資料を基に発表、インタビュー活動	
算数	問題の考え方の説明		
理科	実験結果からの考察の記述	実験の手順、結果、考察の発表	
道徳	資料を読んで考えたこと、話し合いを通して考えたことの発表		
総合的な学習の時間	調べ学習のまとめの資料、発表原稿	作成した資料を基に発表	

今後の課題

- 1 6年間を見通してつなぐ言葉を効果的に指導し、児童の言語に対する意識を高めていけるよう、第3学年以外の学年の指導計画例を作成する。
- 2 本研究は、書く活動の場面を中心に進めたが、話す・聞く活動の場面、読む活動の場面との関連付けについて、さらに検討していく必要がある。